

達成欲求とロールシャッハ指標との関連

医療法人香流会 絃仁病院 三浦 菜月
中京大学心理学部 明翫 光宣

Association between achievement motivation and Rorschach test variables

MIURA, Natsuki (Koujin Hospital)
MYOGAN, Mitsunori (Chukyo University School of psychology)

In this paper, to investigate the relationship between achievement motivation and Rorschach test variables, we conducted a questionnaire survey consisting of the Multidimensional Self-Oriented Perfectionism Scale and the Rigidity Scale on 201 university students, 35 of whom also took part in individual psychological assessments that included the Rorschach test and a verbal comprehension test (Wechsler Adult Intelligence Scale-Third Edition). As a result, an association was found between setting high personal standards (achievement motivation) and vague W (Whole) responses on the Rorschach test. These findings suggest that W responses should be classified by form-level rating (e.g. differentiation of concept) in order to assess achievement motivation using the Rorschach test.

Key words: Achievement motivation, W:M, vagueW, Form-level

．序論

ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）は、スイスの精神科医 Herman Rorschach（1921）が創案したインクプロットによる多義的な図形を刺激材料とし、個人の行動や観念内容のサンプルを採取し、パーソナリティの把握、理解を目的とする投射法検査の1つである。ロ・テストでは多くの解釈仮説があるが、実証的な研究がされた変数はそれほど多くない。今回、筆者らは達成欲求の高さを推測する全体反応（以下W反応）と人間運動反応（M反応）の個数の比であるW:Mに注目した。

W:MはKlopferによって導き出された仮説である（片口，1987）。Klopfer法の標準的なテキストには以下のように記載されている。「W:Mの比率は、被検者の知的野心がどの程度裏付けをもつのかを示す。W:Mの比率は大体2:1で、W反応が良好のときには、知的業績に関する欲求を満たすに足る創造的な潜在力のあることの証拠であるとみられる。……中略……WがMの2倍より大きいときは（ $W > 2M$ ）要求水準が高すぎる。この仮説は形態水準に照らして少し修正することが必要なときがある。もし、WがMの2倍より少ないなら（ $W < 2M$ ），その人は満足すべき出口をまだみつけない創造的な潜在力をもつことを示す（Klopfer &

Davidson, 1962；河合訳，1964；P. 166）」

日本では片口法や名大法など若干の修正をしながらも基本的にKlopferの仮説を取り入れている。片口（1987）は、以下のW反応の仮説「W反応が多すぎると競争心が強く野心的でありすぎ、対人的な緊張感や過度に高い人柄がうかがえる（片口，1987，P. 172）」を基本に、強迫的パーソナリティとの関連で指摘している（片口，1987，Pp. 226-227）。ExnerもW:Mを達成欲求の度合いを示すものとして情報処理過程に関連するロールシャッハ変数として解釈に採用している。Exnerは、その人が使える自分の資質に見合った情報処理能力を評価するのにW:Mが役立つと指摘している（Exner，2000：2002）。

このようにW:Mの心理学的意味が考案され、ロールシャッハ解釈で活用されている一方で、W:Mと達成欲求の高さについて実証的な研究はまだ行われていない。さらに、W:Mの解釈仮説はW反応とM反応の個数の比率であり、反応の質については言及していない。従来の解釈仮説は形態水準が高い反応を想定しており、Klopfer（1962）は反応の形態水準についても考慮すべきだと指摘している。つまり、形態水準が高いW反応やM反応が多く出現した場合と形態水準が低いW反応やM反応が多く出現した場合では一概に個数だけでこの

解釈仮説を適用することは望ましいといえない。しかし、Klopfer以降のロールシャッハ・システムにおいても形態水準を加味したW:Mの指標になっていない点が課題点ではないだろうか。W:Mの解釈仮説の理論的根拠として以下W反応、M反応の特徴について解説を行う。

(1) W 反応

Rorschach はW反応を個人が取り巻く環境の構成要素を意味ある概念に組織化する知的操作と関連があると考えていたようである (Exner, 2002)。日本では片口 (1987) が「構成的なW反応を多く示す人は、連想活動豊かで、総合力があり、また知的活動に持続性を持ちうる人であり、未分化で曖昧なW反応を多く示す人は全体で見なければいけないものと独り決めしている (P. 172)」と解釈している。最近ではExner (2002) が「W反応は刺激野全体を処理しようとする動機づけの指標 (中村・野田ら訳 P. 425)」と考え、W反応を多く産出することは情報処理過程において多くの努力が払われていると解釈仮説につなげている。このようにW反応は高い知性と複雑な情報処理過程と大きく関連することが示唆されている。Rorschach 自身も、W反応の割合が大きいことは高い知能と情報を創造的に総合する能力があると考えていたが、その後の研究でW反応と知能の関連はみられなかったようである (Holzberg & Belmont, 1952)。W反応の解釈仮説において、Piotrowski (1957) は、特に構造化されたW反応は計画を遂行する能力や外面的な目標の追及能力があると指摘した。Blatt & Allison (1963) は、W反応と問題解決能力の間に有意な正の相関を見出している。つまり、柔軟に様々な問題解決法を考えることができる人は「構造化されたW反応」を産出しやすいということになる。

一方で未分化なW反応にも着目する必要がある。W反応は幼児の口・テストでも出現するが、成人と比べると質に違いがみられる。小沢 (1970) は、最初に未分化なW反応が現れ、次いで部分への関心の高まりの時期を経て、構成的なW反応を出しうる力を獲得していくという順序を認めうるとしている。Friedman (1952) は、幼児期は原始的知覚が優勢であるが精神発達に伴い正確に詳細に知覚されるようになるとしている。Meili-Dworetzki (1956) は、未分化の知覚から統合的な知覚に変化する要因は精神構造の柔軟性または可塑性の発達で

あると述べている。辻 (1997) は、年齢による領域と形態水準の推移に着目し、対象を正確に把握できる前の曖昧で未分化な知覚を初期集約的把握型以前の把握型と定義している。

(2) M 反応

Rorschach (1921) は、口・テストにおける運動反応を、形態知覚プラス運動感覚の流入によって決定される反応と定義した。Rorschach (1921) は、運動反応は人間の運動も動物の運動も同じスコアとしたが、その後、人間運動反応 (M 反応) と動物運動反応 (FM 反応) に分けられた。M 反応は、人間あるいは人間類似のものを図版に見る際、それら何らかの動作や姿勢を示していると判断される反応である (片口, 1987)。

M 反応には共感性や想像力など実に様々な解釈仮説が存在する。中でも知能との関連は多くの研究で指摘されている。Altus & Thompson (1949) はM反応の出現数が多いことは優れた知能を示し、M反応が欠如していることは知能が低いことを示すと述べている。Schulman (1963) はM反応と抽象的な思考との間に正の相関を示している。片口 (1987) は、良い形態水準を示すM反応の出現は低い知能を否定するものであり、このようなM反応が多く見られることは高い知能を示すとしている。

ウェクスラー式知能検査は臨床現場で使用されることが多いため、口・テストとの関連について研究がされてきた。Armitage, Greenberg, Pearl, Berger, & Daston (1955) はウェクスラー知能検査とM反応との間に相関があることを報告した。Krishnamurthy, Archer, & House (1996) はウェクスラー知能検査の言語性知能とM反応との間に有意な相関が見られ、動作性知能よりも高い相関が示された。これらのことから、言語性知能の方が非言語性知能よりもM反応との関連があると考えられている。さらに下位検査の得点に着目すると、田中 (1958)の研究ではM反応とウェクスラー・ベルビュー知能検査の言語性検査との間に有意な相関がみられ、特に「共通点」、「常識問題」、「言葉の理解」の下位検査において相関が高いことが示されている。現在使用されているウェクスラー成人用知能検査第3版 (Wechsler Adult Intelligence Scale- : WAI S-) では「共通点」は「類似」、「常識問題」は「知識」、「言葉の理解」は「単語」に相当する。

(3) 本研究の目的

本研究では、W : M の指標と質問紙による達成欲求特性との間に関連があるか検討する。また、形態水準の側面からこの問題に焦点を当て、形態水準によって解釈仮説が変化する可能性についても検討を行いたい。

． 方法

(1) 調査協力者

質問紙調査協力者は、A 県の大学生 201 名であった。性別の内訳は男性 50 名、女性 151 名であった。平均年齢は 20.00 歳 (SD = 0.89) であった。そのうち、個別調査に参加した協力者は 35 名であった。性別の内訳は男性 9 名、女性 26 名であった。平均年齢は 20.06 歳 (SD = 0.96) であった。

(2) 手続き

2014 年 1 月中旬～2014 年 9 月下旬に講義終了後または大学構内で、個別調査参加募集用紙が添付された質問紙を配布し、個別調査の協力者の募集を行った。後日、個別調査協力の同意を示した人に個別調査を実施した。個別調査は 2014 年 4 月中旬～2014 年 11 月下旬に実施した。

(3) 質問紙調査

質問紙はフェイスシート、多次元自己志向的完全主義尺度 (桜井・大谷, 1997)、心の硬さ尺度 (山下・長縄, 2012)、個別調査参加募集用紙で構成されていた。

フェイスシートには、研究目的、個別調査への参加募集、データの取り扱い、調査不参加や途中辞退が可能であること、個人情報の保護について記載し、性別、年齢、学年の記入を求めた。

多次元自己志向的完全主義尺度 (桜井・大谷, 1997) は 20 項目で構成され、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 5 件法であった。下位尺度は(1)高目標設定、(2)行為疑念、(3)失敗過敏、(4)完全性追求で構成されている。

心の硬さ尺度 (山下・長縄, 2012) は 20 項目で構成され、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 5 件法であった。下位尺度は(1)非順応性、(2)柔軟性・応用力の欠如、(3)規律・規範の偏重、(4)過度のこだわり、(5)融通性欠如で構成されている。いずれの心理尺度も作成者の許可を得て使

用した。

なお、本研究では、W : M は達成欲求の指標とされており、 $W > M$ の場合は自分自身に対して高い目標を課し、完全性を追求する傾向があると考えられ、多次元自己志向的完全主義尺度では、完全性追求と相関を示すと推測される。

W の形態水準による分類を行うことで、片口 (1987) が示すように「W でなければいけないと独り決めしている (P. 172)」傾向を検証するために心の硬さ尺度を使用し、W や形態水準の低い W が増加するほど柔軟性が低いなどの特徴が示されると推測される。

また、M や形態水準の高い M が増加するほどウェクスラー知能検査の言語性検査の評価点が増加すると推測される。

(4) 個別調査

個別調査では、大学の実験室にて、まずウェクスラー成人用知能検査第 3 版 (Wechsler Adult Intelligence Scale- : WAIS-) のうち、言語理解指標 (Verbal Comprehension Index : VCI) の「単語」、「類似」、「知識」の 3 つの下位検査を実施した。その後、口・テストを片口法 (1987) に準拠して実施した。

結果の集計には Rorschach Date System[®] (RODS : 金子書房) を使用した。個別調査の実施・採点は口・テストの経験が 10 年以上の臨床心理士の指導のもと、筆者 (三浦) が行った。また、口・テストのスコアリングの妥当性を確保するため、臨床心理学専攻の大学院生 2 名が評定を行い、一致率は 80.21% であった。スコアの不一致があった場合は合議の上で決定した。結果の分析は、IBM SPSS Statistics 20[®] を用いた。

(5) 研究の倫理的配慮

本研究の実施においては、中京大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得た。個別調査参加者には実施前に、研究目的、研究方法・所要時間、個人情報の保護、参加辞退の機会保障、参加辞退の際の不利益防止への配慮、緊急時の対応について書面で説明し、以上の研究参加について同意書にて同意を得た。

Table 1 各尺度の下位尺度の相関 (N = 201)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
多次元自己志向的完全主義尺度									
1. 高目標設定		.29 *	.18 *	.60 **	-.17 **	-.38 **	-.09	.29 **	.08
2. 行為疑念			.41 **	.48 **	.16 *	.07	.32 **	.18 *	.24 **
3. 失敗過敏				.59 **	.25 **	.14 *	.38 **	.37 **	.25 **
4. 完全性追求					.03	-.13	.23 **	.41 **	.20 **
心の硬さ尺度									
5. 非順応性						.51 **	.48 **	.05	.38 **
6. 柔軟性・応用力の欠如							.46 **	-.11	.22 **
7. 規律・規範の偏重								.17 *	.27 **
8. 過度のこだわり									.13
9. 融通性欠如									

* p < .05, ** p < .01

Table 2 W の分類・形態水準と心理尺度との相関関係 (N = 35)

	W	W+	W-	不形態W	不合理W	F+%	Σ F+%	R+%
多次元自己志向完全主義尺度	.04	.00	.10	.42*	-.05	-.11	.02	-.12
高目標設定	.22	.09	.37*	.40*	.28	-.27	-.26	-.34*
行為疑念	.15	.13	.11	.35*	-.01	-.15	.01	-.06
失敗過敏	-.19	-.21	-.10	.23	-.21	-.05	.06	-.05
完全性追求	-.05	-.05	-.02	.36*	-.18	.06	.17	.00
心の硬さ尺度全体	-.19	-.19	-.15	.09	-.22	.13	.13	.07
非順応性	-.18	-.26	.00	.14	-.06	.02	-.17	-.18
柔軟性・応用力の欠如	-.25	-.16	-.32	-.36*	-.23	.18	.18	.22
規律・規範の偏重	-.02	.08	-.18	.10	-.26	.06	.24	.16
過度のこだわり	.17	.20	.07	.12	.03	.08	.29	.24
融通性欠如	-.11	-.19	.03	.29	-.08	.03	-.05	-.16

* p < .05, ** p < .01

結果

(1) 質問紙の基礎データ

本研究における質問紙調査参加者全員の多次元自己志向的完全主義尺度と心の硬さ尺度においてピアソンの積率相関係数を算出した (Table 1)。

多次元自己志向的完全主義尺度と心の硬さ尺度では相関がみられる下位尺度が多く存在した。r = .30 以上のものを以下に示した。

完全性追求と過度のこだわり、失敗過敏と規律・規範の偏重、失敗過敏と過度のこだわり、行為疑念と規律・規範の偏重との間に正の相関がみられた (r = .41, p < .01; r = .38, p < .01; r = .37, p < .01; r = .32, p < .01)。高目標設定と柔軟性・応用力の欠如の間に負の相関がみられた (r = -.38, p < .01)。このように完全主義と心の硬さは多くの点で正の相関関係にあることがうかがえる一方で、高目標設定

は他の下位尺度とは異なる性質を持つこともうかがえた。

(2) 形態水準による W 反応の分類と外的指標との対応

W 反応を形態水準や性質によって分類した。W 反応のうち、形態水準が + または - のものを「W +」、形態水準が - または - のものを「W -」とした。さらに、W - のうち、半確定概念や無形態概念による W 反応を「不形態 W」、プロットとの一致度の低下や不適切な説明により形態水準が低下したものを「不合理 W」と定義した。W, W+, W-, 不形態 W, 不合理 W, F + %, F + %, R + % と多次元自己志向完全主義尺度・心の硬さ尺度との相関関係を検討した (Table 2)。

Table 2 のように形態水準別に分類した結果、W - と不形態 W において有意な相関関係がみられた。

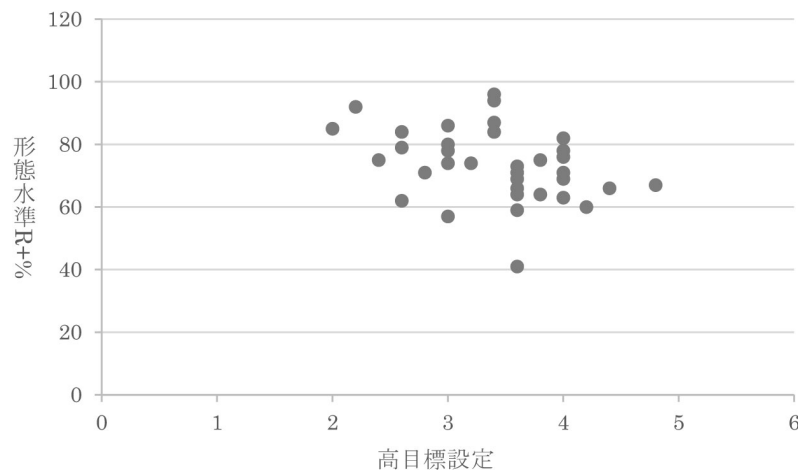


Figure 1 高目的設定と形態水準 (R + %) との関係

Table 3 M の分類と WAIS の評価点・心の硬さ尺度との相関係数 (N = 35)

	M	M+	M-
知能検査			
VCI	-.30	-.28	-.18
単語	-.22	-.22	-.10
類似	-.18	-.16	-.14
知識	-.31	-.28	-.22
心の硬さ尺度			
心の硬さ尺度全体	-.03	.01	-.09
非順応性	.01	-.03	.09
柔軟性・応用力の欠如	.00	.07	-.18
規律・規範の偏重	-.12	-.08	-.16
過度のこだわり	.00	.08	-.19
融通性欠如	-.02	-.08	.13

W - では、高目標設定と W - との間に相関がみられた ($r = .37, p < .05$)。不形態 W では、多次元自己志向的完全主義尺度総合得点と不形態 W、高目標設定と不形態 W、行為疑念と不形態 W、完全性追求と不形態 W との間に有意な正の相関がみられた ($r = .42, p < .05$; $r = .40, p < .05$; $r = .35, p < .05$; $r = .36, p < .05$)。また、心の硬さ尺度の柔軟性・応用力の欠如と不形態 W との間のみ負の相関がみられた ($r = -.36, p < .05$)。

形態水準指標である R + % では、高目標設定との間に負の相関がみられた ($r = -.34, p < .05$)。この相関関係について散布図を示したところ Figure 1 のようになる。Figure 1 をみると多くの人数が $60 < R + \% < 100$ に位置することがわかり、また高目標設定の値が本研究データの平均値以上 (3.40 以上) にあたる分布をみると多くの人数が $60 < R + \% < 80$ に集中している。

なお、不形態 W が多くの変数と相関関係を示したため、重要なスコアと考えられた。そこで本研究の不形態 W の個数と人数の関係を示すと 0 個が 15 名、1 個が 9 名、2 個が 7 名、3 個が 3 名、4 個が 0 名、5 個が 1 名であった。

(3) 形態水準による M 反応の分類と外的指標

WAIS- の VCI の平均は 106.83 (± 10.36)、下位検査の「単語」の評価点の平均は 12.06 (± 2.71)、「類似」の評価点の平均は 11.37 (± 2.49)、「知識」の評価点の平均は 10.26 (± 2.15) であった。M、M+、M- と WAIS- の VCI および下位検査の評価点、心の硬さ尺度との相関関係について、ピアソンの積率相関係数を算出した (Table 3)。

M、M+、M- のいずれにおいても VCI および各下位検査の評価点、心の硬さ尺度および下位尺度との有意な相関関係はみられなかったものの、相関

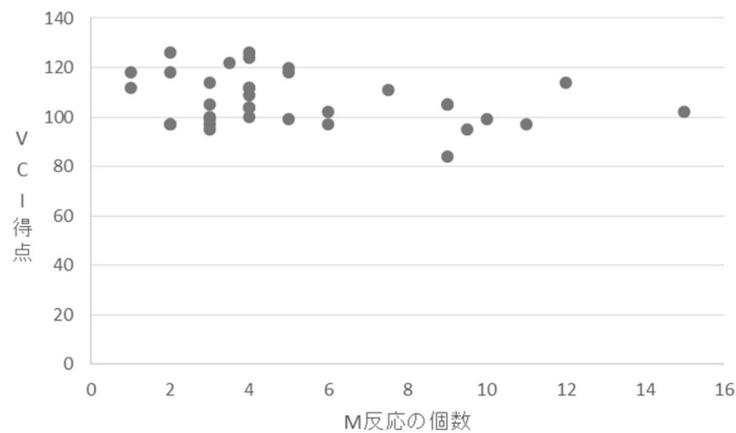


Figure 2 VCI と M 反応の散布図

Table 4 形態水準による W : M と各尺度の相関 (N = 35)

	W/M	W+/M+	W-/M-
多次元自己志向的完全主義尺度	.03	-.07	.04
高目標設定	.04	-.08	.31
行為疑念	-.18	.08	-.05
失敗過敏	-.11	-.14	-.07
完全性追求	-.05	-.13	.01
心の硬さ尺度	.05	-.07	-.12
非順応性	-.03	-.19	.08
柔軟性・応用力の欠如	-.06	-.06	-.30
規律・規範の偏重	.28	.23	-.02
過度のこだわり	.01	-.07	.07
融通性欠如	.04	.03	-.14

係数としては VCI と M で $r = -.30$ 、知識と M で $r = -.31$ であった。なお、心の硬さ尺度との相関係数は無相関かそれに近い値であった。

VCI や知識と M 反応の関係性を散布図として Figure 2 に示す。

(4) 形態水準による W : M の分類と外的指標

形態水準別の W : M 指標で検討する。W : M のうち、W+ と M+ の比率を W+ : M+、W- と M- の比率を W- : M- とした。W : M、W+ : M+、W- : M- の比率と多次元自己志向的完全主義尺度と心の硬さ尺度との関連についてピアソンの積率相関係数を算出し、Table 4 に示した。なお、本研究では W : M と同様にこれらの比率を間隔尺度として扱うため、W : M を W/M、W+ : M+ を W+/M+、W- : M- を W-/M- として用いた。

その結果、W/M、W+/M+、W-/M- と多次元自己志向的完全主義尺度と心の硬さ尺度に有意な相関はみられなかった。しかし、相関係数では、規律・規範の偏重と W/M、W+/M+ が .28 と .23、

高目標設定と W-/M- が $r = .31$ 、柔軟性・応用力の欠如と W-/M- が $r = -.30$ であった。

考察

(1) 質問紙の相関分析

多次元自己志向的完全主義尺度と心の硬さ尺度の 2 つの心理尺度は、W 反応の値や形態水準によって示される解釈仮説を検討するために外的基準として設定したものである。Table 1 から、完全性追求と過度のこだわり ($r = .41$)、失敗過敏と規律・規範の偏重 ($r = .38$)、失敗過敏と過度のこだわり ($r = .37$)、行為疑念と規律・規範の偏重との間 ($r = .32$) に正の相関がみられた。一方、高目標設定と柔軟性・応用力の欠如の間では $r = -.38$ の負の相関がみられた。

多次元的自己志向完全主義尺度の先行研究では、従来から高目標設定は心理的不健康に対して負の影響を及ぼす結果が報告されている (大谷, 2004)。また行為疑念と失敗過敏においては抑うつ症状と相

関が示されており (伊藤・上里, 2002), 行為疑念や失敗過敏が高いほど精神的健康度が低いという結果も示されている (高橋, 2005)。最近, 福井 (2009) は高目標設定が一律に心理的健康に好影響を及ぼすと論じることは適切ではないことを自己志向的完全主義尺度と成人愛着スタイルの下位尺度得点を用いた 7 群の典型的なクラスターを分析して示している。さらに心理的影響を及ぼす下位尺度は高目標設定, 失敗過敏, 行為疑念の個人内バランスと成人愛着スタイルとの組み合わせであることが示唆されている (福井, 2009)。

本研究においても, 失敗過敏, 行為疑念が, 規律・規範への偏重の特性と関連があり, 高目標設定が柔軟性・応用力と関連があることは先行研究と概ね一致した結果であるといえる。では, これらの心理尺度が本研究で検討するロールシャッハ変数とどのように関連するのであろうか。

(2) 形態水準による W 反応の分類

本研究では, W 反応を形態水準によって分類し, それぞれの心理尺度で関連があるかを検討した (Table 2)。

多次元自己志向完全主義尺度の高目標設定と W -, 不形態 W との間に有意な正の相関が, $R + \%$ との間に有意な負の相関が認められた。一方, 心の硬さ尺度の柔軟性・応用力の欠如と不形態 W との間に有意な負の相関が, $R + \%$ との間に有意な正の相関が認められた。これは Table 1 で高目標設定と柔軟性・応用力の欠如の間に負の相関が認められたことを踏まえると, これらの変数は連動して動いていると考えることができる。

高目標設定は, W 反応を分類することによってロールシャッハ変数との関係が明らかになったと考えられる。つまり, 形態水準がやや低下しても反応産出しようとする W 反応への動因が反映されたとみることができる。Figure 1 を参照する限り, 高目標設定の高い人は形態水準がやや低くなっていること, それは主に不形態 W によってもたらされていることを考えると, 多少無理をして全体反応を産出しようとしており, 高目標設定は適応的ではない印象を受ける。しかし, 心の硬さ尺度の柔軟性・応用力の欠如に注目すると, 不形態 W に負の相関関係が見られ, $R + \%$ との間に有意性は認められないものの相関係数は $r = .22$ を示していた。柔軟性・応用力の欠如, 不形態 W, $R + \%$ との関連につい

ては, 辻 (1997) の具象しぼりが起きていると考えることができる。辻 (1997) によると, ロールシャッハ反応の中に Fpm (本研究では不形態 W) がない場合にしぼりを反映することがあると述べている。具象しぼりの中にある主体 (被検者) は, 目に見えない心の動きを認知することが困難で, 心の葛藤などの抽象的なものは処理することが困難であるとされている (辻, 1997)。本研究では不形態 W が 0 個の者は 15 名おり, 15 名の中に具象しぼり特徴を持つものが該当すると考えられる。このように考えていくと形態水準が高すぎず $R + \% = 80$ で不形態 W が 2, 3 個程度を産出するというような「ほど良いバランスが本来の適応力の高さである」と筆者らは考えている。本研究が示すように達成欲求の高さを見ていくには, W 反応の形態水準別の分類が必要であることが本研究で示唆された。

(3) 形態水準による M 反応の分類

本研究では, 形態水準によって M 反応を分類し, それぞれの質問紙尺度や WAIS- と関連があるかを検討した。M, M+, M- のいずれにおいても VCI および各下位検査の評価点, 心の硬さ尺度との有意な相関はみられなかったが, 相関係数としては VCI と M で $r = -.30$, 知識と M で $r = -.31$ であった。なお, 心の硬さ尺度との相関関係は無相関かそれに近い値であった。田中 (1958) の研究から本研究でも VCI に代表される言語性知能と M 反応が正の相関を示すと予測していたが本研究結果はそれに反する結果であった (Figure 2)。形態水準で M 反応を分類したが大きく異なる結果ではなかった。

M 反応には知能と関連があるという研究がある一方で, 知能と関連がみられないという結果を示す研究も存在する。例えば, Tucker (1950) は, 下位検査の「理解」や「類似」では M と相関を示したが, 「知識」では相関は示されなかった。田中の研究 (1958) ではこれら 3 つと相関関係を示していることから, 研究によって M 反応と知能との関連は一定していない。田中 (1958) や Armitage et al. (1955) で使用しているウェクスラー検査の項目が変化しているので, 異なる結果が得られたとも考えられる。その他の要因として田中 (1958) のデータは少年鑑別所での非行少年 100 名のデータであり, IQ の範囲が 89.8 ± 17.40 (本研究 VCI = 106.83 ± 10.36) であり, M の範囲は 1.3 ± 1.88 (本研究 $5.21 \pm$

3.27) である。さらに田中 (1958) のデータにおいても高 IQ 群 (IQ = 102 ~ 133) は M が多くなるが標準偏差も広がっていることを指摘している (田中のデータ: $M = 1.79 \pm 1.51$)。このように定型発達群と臨床群との母集団分布の違いも十分に考えられるであろう。ここで改めて田中 (1958) が「M の多いことが知能の高いことを暗示するという関係は存しても、M の少ないことが低い知能を示すとは限らない (P. 24)」という指摘が参考になる。知能の測定尺度が異なるが、田中 (1958) の結果を本研究の結果 (Figure 2) を踏まえると、M と知能との関係は直線的な関係ではなく、ある地点をピークとした山型の分布を示すのかもしれない。本研究の目的との関連では M の外的基準との相関関係が十分反映されなかったといえる。

(4) W : M 指標との関連について

W : M 指標に関して、有意性は認められなかったものの相関係数では、規律・規範の偏重と W/M、W + /M + が $r = .28$ と $r = .23$ 、高目標設定と W - /M - が $r = .31$ 、柔軟性・応用力の欠如と W - /M - が $r = -.30$ であった。M 反応が心の硬さ尺度とはほぼ無相関であったこと、W -、不形態 W との相関の動きとほぼ対応することを考えると、W 反応の分類が反映されたと考えられる。

今回の研究から、W 反応の内容について、多次元自己志向完全主義尺度と心の硬さ尺度で捉えることが可能であり、また W の形態水準によって分類することによって達成欲求の程度をより捉えることが可能であることが示唆された。一方、M 反応の特徴を今回の研究では正確に捉えることができなかったため、W : M の指標の妥当性の検討が不十分であったが、W : M の M を指標として組み合わせることの是非について再検討する可能性がまだ残されている。

(5) 本研究の限界と今後の W : M 研究への展望

本研究では、いくつかの限界点があげられる。

1 点目は、研究参加者数である。本研究では二次調査参加者が 35 名と少なかった。口・テストの変数と心理尺度との相関研究において有意性が検出されにくくなっている場合が散見された。そのため、研究参加者数を増やし相関関係について再度確認を行うことが求められる。

2 点目は使用した尺度である。特に M 反応につ

いて、知能検査や心の硬さ尺度との相関関係を検討したが、M 反応が人間の心理特性の何を測定しているかについて今回の研究では明確に示すことが出来なかった。これまでの研究で M 反応と共感性について関連性がある先行研究 (高橋, 1996) が見られるものの、そのほかの解釈仮説に示されている心理特性については不明のままである。M 反応が持つ心理学的意味をくまなく記述しようとする試みは、恐らく M に関連する極めて複雑な活動を記述できずに失敗に終わるという Exner (2002) の忠告もあるが、M 反応の妥当性を検討する試みは今後も必要であろう。

また本研究と関連として完全主義 (多次元自己志向尺度) や心の柔軟性 (心の硬さ尺度) および知能検査 (VCI) が他のロールシャッハ変数の何と対応するのかについては検討する必要がある。この点については別の機会にて報告する予定である。

本研究では、W : M と達成欲求と関連があるという仮説は支持されなかったが、W 反応を分類すること、また W : M の比率だけでなくそれぞれの反応を質的に分類して考慮する必要性が示唆された。さらに、不形態概念の W 反応を多く産出する人は、高目標設定が高い傾向があり、同じ W - であっても不形態概念と不合理概念を分類して解釈する必要があるという知見が本研究から得られた。しかし、この不形態 W の高さと心理学的意味を確立するためにさらに検討を重ねることが求められるであろう。

W : M については W 反応の解釈仮説が強く反映されると推測される。片口 (1987) においても W : M の比率の記述がされているのは W 反応に関する記述であり、M 反応の記述では触れられていなかった。これは W : M の解釈仮説が W 反応の解釈仮説に基づいているところが多いことが理由としてあげられる。現在まで W : M の実証的な研究が行われてこなかった理由は W 反応についての研究で様々な解釈仮説が支持されており、その解釈仮説に基づいて W : M の解釈仮説が考えられてきた。しかし、Meyer et al (2011) によって開発されたロールシャッハ・アセスメントシステム (R-PAS) では W : M の比率は実証的な研究がないことから指標に含まなかった。本研究では、W : M についての研究を行い、W : M の指標の実証的研究の 1 つの回答を示す役割を担ったといえる。今後は、本研究からより多くの W : M の解釈仮説の妥当性を検証する研究へと続くことが望まれる。

謝辞

本論文は、筆者（三浦）が平成 27 年 3 月に中京大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を再分析したものである。

本研究の質問紙調査や二次調査に快くご協力いただいた研究参加者の方々に深く感謝いたします。また、日々の議論を通じて多くのご意見やご示唆をいただいたゼミの皆様から感謝いたします。

引用文献

- Altus, W. D., & Thompson, G. M. (1949). The Rorschach as a measure of intelligence. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 341-347.
- Armitage, S. G., Greenberg, P. D., Pearl, D., Berger, D. G., & Daston, P. G. (1955). Predicting intelligence from the Rorschach. *Journal of Consulting Psychology*, 19, 321-329.
- Blatt, S. J., & Allison, J. (1963). Methodological considerations in Rorschach research: The W response as an expression of abstractive and integrative strivings. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 27, 269-278.
- Exner, J. E. (2000). *A Primer for Rorschach Interpretation. Rorschach Workshops*. 中村紀子・野田昌道 監訳 2002 ロールシャッハの解釈. 金剛出版.
- Exner, J. E. (2002). *The Rorschach: A comprehensive system: Basic foundations and principles of interpretation*, Vol. 1. (4th ed). New York: Wiley. 中村紀子・野田昌道 (監訳) (2009). ロールシャッハ・テスト 包括システムの基礎と解釈の原理. 金剛出版.
- Friedman, H. (1952). Perceptual regression in schizophrenia: An hypothesis suggested by the use of the Rorschach test. *Journal of Genetic Psychology*, 81, 63-98.
- 福井義一 (2009). 高目標設定は本当に適応のか? - 成人愛着スタイルを調整変数として - . *心理学研究*, 79, 522-529.
- Holzberg, J. D., & Beumont, L. (1952). The relationship between factors on the Wechsler-Bellevue and Rorschach having common psychological rationale. *Journal of Consulting Psychology*, 16, 23-30.
- 伊藤 拓・上里一郎 (2002). 完全主義およびネガティブな反うつうつ状態の関連性 抑うつの脆弱要因としての完全主義についての再検討 . *カウンセリング研究*, 35, 185-197.
- 片口安史 (1987). 改訂新・心理診断法. 金子書房.
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G., & Holt, R. R. (1954). *Developments in the Rorschach technique*, Vol. 1. New York: Harcourt, Brace and World.
- Klopfer, B. & Davidson, H. H. (1962). *The Rorschach Technique: an Introductory Manual*. Harcourt.

- Brace & World. 河合隼雄訳 1964 ロールシャッハ・テクニク入門. ダイアモンド社.
- Krishnamurthy, R., Archer, R. P., & House, J. J. (1996). The MMPI-A and Rorschach: A failure to establish convergent validity. *Assessment*, 3, 179-191.
- Meili-Dworetzki, G. (1956). The development of perception in the Rorschach. In B. Klopfer. (Eds.). *Developments in the Rorschach technique*, Vol. 2. New York: Harcourt, Brace and World. pp. 104-176.
- Meyer, G. J., Viblione, D. J., Mihura, J. L., Erard, R. E., & Erdberg, P. (2011). *Rorschach performance assessment system: Administration, coding, interpretation, and technical manual*. LLC. 高橋依子 (監訳) 高橋真理子 (訳) (2014). ロールシャッハ・アセスメントシステム. 金剛出版.
- 大谷保和 (2004). 自己志向完全主義の 2 側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討 - 統制不可能事態への対処を媒介として - . *心理学研究*, 75, 199-206.
- 小沢牧子 (1970). 子どものロールシャッハ反応. 日本文化科学社.
- Piotrowski, Z. A. (1957). *Perceptanalysis*. New York: Macmillan.
- Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik*. Bern: Ernst Biecher. 鈴木睦夫 (訳) (1998). 新訳訳精神診断学. 金子書房.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. *心理学研究*, 68, 179-186.
- Schulman, R. E. (1963). Use of the Rorschach rating scale in predicting movement in counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 10, 198-199.
- 高橋久美 (1996). 共感性とロールシャッハ・テストの人間運動反応との関連について. *ロールシャッハ研究* 38, 99-112.
- 高橋幸子 (2005). 自己志向的完全主義における自己没入傾向が心理的健康に与える影響. *學苑*, 772, 21-32.
- 田中富士夫 (1958). ロールシャッハの運動反応と知能との関係. *教育心理学研究*, 6, 85-91.
- 辻 悟 (1997). ロールシャッハ検査法 形式構造解析に基づく解釈の理論と実際. 金子書房.
- Tucker, J. B. (1950). Rorschach human and other movement responses in relation to intelligence. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 283-286.
- 山下利之・長縄久生 (2012). 心の硬さの測定とその応用. *日本知能情報ファジィ学会誌*, 24, 827-835.